

茅葺き職人―廣山美佐雄〔後編〕



冬風に吹く季節風「筑波おろし」を防ぐための屋敷林に囲まれた茅葺き民家。伝統的な農村景観を今に伝える。

新聞社主催「にほんの里100選」にも選ばれた、茨城県石岡市北部の「八郷」地区。今も多くの茅葺き屋根が残るこの地区で、筑波流の茅葺き職人・廣山美佐雄親方は茅手をめざす若い世代を弟子にとり、技術の伝授に努めている。技を受け継ぐことの難しさについて語ってもらった。



「常陸風土記の丘」の職員2名が廣山親方の指導のもと、筑波流茅葺きの担い手になるべく修業に励んでいる。

後継者不足が深刻な筑波流茅手

筑波流茅葺きの大きな特徴の一つに、装飾性の高さが挙げられる。棟の小口の部分に文字や絵を描き入れる「キリトビ」(「キリトメ」とも)。束ねたシュロで棟の頂上部を飾り付ける「大名ぐし」。古い茅や新しい茅、種類の違う材料を交互に葺くことで軒の部分に鮮やかな縞模様を形成する「トオシモノ」など、素朴ながらも技巧の粋を尽くした数々の装飾で構成されており、その多彩さ・芸術性は他の追随を許さない。

日本でも最高レベルと言われる洗練された筑波の茅葺き技術―しかし、茅葺き屋根の減少に伴って職人は全員七〇代以上と高齢化し、人数も数年前の半分に減るなど、その貴重な技の

伝承が危ぶまれている。廣山親方も、後継者育成が一番の問題だと考える。

「県内全体で見ても減ってきてるわけだから、若えのがもう二人は欲しいところだな。このままだと筑波流の後継者がいなくなっちゃうから」

一流職人の下で学ぶ

農村に伝わる文化を大切にしつつ、筑波山麓の茅葺き屋根やその技を後世に受け継ぐべく二〇〇四(平成十六)年に設立された「やさと茅葺き屋根保存会」。茅葺き民家のオーナーや職人を中心とした有志が会員となり、行政の協力も得て、毎年年末の茅刈りをはじめ見学会・交流会、次代を担う若手職人の養成などの活動を続けている。

「俺は他のところより安く請けてるから、仕事がどんどん舞い込んでくるんだよ。ホントはもうちょっともらいたいけど、弟子二人抱えてるし、『親方あんなにもらってるのか』なんて言われるわけにいかねえから(笑)、変なところは見せられねえと思ってがんばってるんだよ」

また、石岡市の歴史体験公園「常陸風土記の丘」では、「職員の派遣」という形で技術継承を志す若者を一流職人に弟子入りさせ、研修を積ませている。

現在、廣山親方の下で茅葺きの技術を学んで

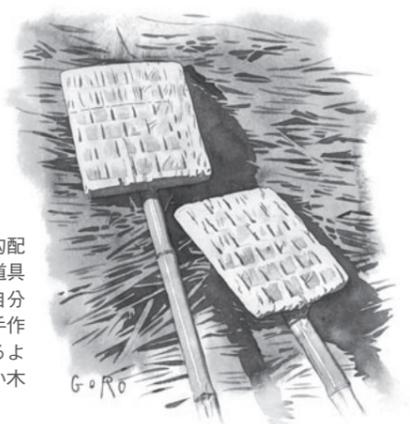


ひろやま・みさお ●1931(昭和6)年、茨城県行方郡(現・行方市)生まれ。父も屋根屋だったがその跡は継がず、婿養子に入った家に弟子入りして茅葺き職人となった。現在は「常陸風土記の丘」や「やさも茅葺き屋根保存会」で茅葺きの保存や技術育成にも従事。2012(平成24)年には「現代の名工」として表彰される。茨城県小美玉市在住。

「覚えるにしても、
生業にするにしても、
仕事がたくさん
なければならぬ」

年季の入った親方の相棒

廣山親方が茅葺きを使う道具を見せてくれた。千鳥格子のような模様が彫られた木の板に一層くらいの柄がついた道具で、「ガギ棒」という。「もう何十年使ってるかな。俺の相棒だよ」
茅を葺いたあとガギ棒で叩くことで、先に葺いた茅を奥に押し込み、雨水を通さない茅葺き



屋根に並べた茅を勾配に沿ってそろえる道具「ガギ棒」。職人が自分の手に合うように手作りする。長年使えるようケヤキなどの堅い木が用いられる。



右/「常陸風土記の丘」に建つ旧坂家の曲屋。移築の際、廣山親方が葺き替えと装飾を一手に担った。左/古茅と新茅が織りなす縞模様「トシモノ」。層の数が多くなるほど技術的に難しくなる。

いる岡野量平さん(二七)もその一人で、約一年前に弟子入りした。

「新聞で『茅葺き職人募集』っていうのを見たのがきっかけです。実家がもともと茅葺きだったので興味があったし、職人の数が減ってるっていうのも聞いてたので、やってみようと思っただけです」

「まだ一年やそこらで、基本的なことも屋根の勾配のこととかもわからないですけど、この道に入った以上は一生かけてやっていくつもりです」

伝統技術継承の難しさ

心強い弟子の言葉だが、廣山親方は素直には喜べない。

「今は平葺き(茅葺き屋根の表層部分の茅)の修復ばかりで、トシモノとかキリトビの修復もないから、筑波流の実践の場もない。彼らの勉強の場もないし、いざれば八郷の茅葺きもなくなってしまうんじゃないかと心配だよ」

「俺が修行中のころは、農閑期はそれこそ毎日仕事あったから。農業忙しい時期でも、茅がなくても小麦ワラや稲ワラでも何でも使ってた。堆肥小屋やら牛小屋やら、とにかく休みなく葺いてた。そうやって一年中屋根の上の上がってたから、腕も上がったし仕事も覚えた」

技を次世代に伝えたいという職人の思い、貴重な技術を保存するための行政の後押し、そして現状を憂い一念発起して技の習得をめざす若い世代の志——これだけの前向きな力が働いても、肝心の「仕事の需要」がなければ、昔ながらの伝統技法は廃れてしまう。「移り変わりの激しい現代社会に、匠の技を残すこと」の難しさがここにある。

「今の二人の弟子もがんばってるけど、まだまだかなあ。自分が若いころは親方や先輩職人のやってることを見て、一日でも早く一人前になってやろうと必死で覚えていったけど、今の若い人はそういうところはない。もっと親方の仕事を盗もうとしないよ」

「トシモノは、昔は年に三軒くらいあったけど、おそらく今後はなくなっちゃうだろうね。トシモノに雨水が染みるまで放つとく家は無いし、これから新しく作ることもまずないから。本音を言えば、覚えるにしても、生業にするんでも、仕事がたくさんないとやっていけない」
キリトビにしても、トシモノにしても、これを極めなければ「筑波流茅手」を名乗れない大切な技。やる気のある若手が育っても、筑波流ならではの「芸術」を実地で経験する機会がないことへの廣山親方のもどかしさが伝わってくるようだった。

屋根にする。硬い茅の束を叩き続けたせいで表面はツルツルに磨かれ、彫られた模様もかなり擦り減っている。

「俺もいろんな家の屋根葺いてきたけど、一軒一軒、勾配がちよっと違えば葺き方も変わる。死ぬまで経験だよ」

年を経ても、生涯自分を磨き続ける。そんな親方の人柄が、古びたガギ棒と重なって見えた。